

本論文は、筆者自身による重障児との長期にわたる教育実践に基づき、重障児の身体と世界との密接な関係を現象学的に解明することにより、重障児の世界とわれわれの世界との通底性を探り、重障児が生きている世界を理解し記述したものである。

第一部では、まず、従来の重障児研究では、重障児の発達が学習課題の設定者の視点からとらえられていたことの問題点が指摘され、重障児がそのつど現に生きている世界をとらえるためには、人間行動の原点へと根源的な問いを向けることの必要性が導き出される。そのうえで、現象学的精神病理学における人間理解のための知見に基づき、重障児の世界とわれわれの世界との通底性を解明するためには「直観」に基づく人間理解の方法が必要であることと、この方法を遂行するためには事例研究が必要であることが論じられる。

第二部は、三人の重障児の事例研究によって構成されている。第一の事例研究では、或る重障児が「円板を穴にはめる」という身体運動を起こすようになった過程が詳しく記述される。そのうえで、フッサールの「キネステーゼ」論に基づき、この運動が可能となるための行動の背景として、面が構成されていることが明らかにされる。第二の事例研究では、寝たきりの重障児が体を起こしていく過程に着目し、フッサールに基づき、身体活動を支える面としての「大地」の存在の意義が見出される。また、大地の上にある様々なものを「地盤」として構成することにより、姿勢を保ったり姿勢を変えることが可能となることが、個々の身体運動に即して明らかにされる。そのうえで、重力のある世界で方向を経験することによる「空間の構成の起源」と、メルローポンティの身体論に基づき、外界のものを知覚しそれに働きかけることによる「身体図式の構成とももの構成」過程とが、解明されている。第三の事例研究では、以上の事例研究で明らかにされた「大地と地盤」、「空間の構成の起源」、「身体図式の構成とももの構成」という三つの視点は、他の重障児との関わりにおいて自明視されてはならず、個々の重障児の活動に即してそのつど新たに吟味し続けることにより、重障児の世界がより豊かに理解可能となることが、いま一人の重障児が体を起こしていく過程に即して具体化されている。第二部は、先行研究や従来の教育実践においては見逃されていた、個々の身体活動を可能にしている行動の背景と生の根源にまで遡り、現象学を駆使してそれらを記述することによって、重障児だけではなく、われわれの身体と世界との密接な関わりをも解明するための視座を開いている。

以上、本論文は、これまで自明とされていた障害のとらえ方と重障児に対する関わり方の背景にあって、それらを暗黙のうちに支えていた人間の生と世界との関係を、事例に即して解明している。また、筆者自身による事例とその記述が、同時に問いの探究過程となっており、実践の記述とこの記述に基づく現象学的解明の過程は、非常に精緻である。こうしたことから、本論文は、重障児との教育実践の基礎研究にだけでなく、子どもが発達していく時の初期の諸問題にも大きな示唆を与えてくれている優れた研究となっている、と評価された。よって、博士（教育学）の学位を授けるにふさわしいと判断された。